



やすらぎと感動の赤井川 人が集まる美しいカルデラの里 赤井川村



赤井川村基礎データ

総人口	1,106人 (R4.12末現在)	製造品出荷額	459百万円 (R2工業統計調査)
高齢人口 (高齢化率)	341人 30.8% (R4.12末現在)	卸・小売年間販売額	523百万円 (H28経済センサス)
世帯数	632世帯 (R4.12末現在)	一般会計規模	2,633百万円 (R4当初予算)
人口密度	3.94人/km ²	村の花	ムラサキヤシオ
面積	280.09km ²	村の木	シラカバ
農業産出額	1,180百万円 (R2市町村別農業産出額)		

赤井川村の紹介

赤井川村は、北海道の南西部・積丹半島の付け根に位置し、札幌市や小樽市など2市4町と隣接している、面積の約80%が山林の農村です。

村名の「赤井川」には諸説ありますが、村ではアイヌ語の「フレ・ペツ」(赤い川)を由来としています。

明治15年に栗屋貞一、井関百合蔵が赤井川を探検し、明治27年より開拓者の入地が始まりました。明治32年に大江村(現在の仁木町大江地区)より分村し、赤井川村戸長役場が設置され、明治39年には2級町村制施行により「赤井川村」となりました。

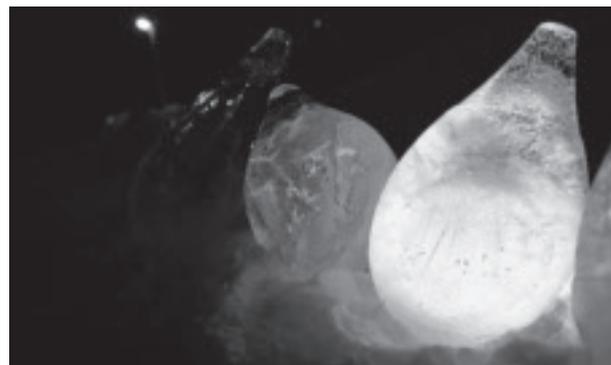
地形の特性として、四方を山に囲まれた「カルデラ盆地」であるため、昼夜の寒暖差が大きいのが特徴です。赤井川村のカルデラ

盆地は、余市川カルデラの中に赤井川カルデラが存在する「二重カルデラ」と呼ばれる珍しい地形でもあります。村の景色の特徴の一つにカルデラを覆う「雲海」が挙げられます。雲海に覆われた赤井川村は、とても幻想的な雰囲気となり、初夏から晩秋にかけて昼夜の寒暖差が大きい日の早朝に、冷水峠展望台などの高台から望むことができます。

平成17年10月に設立されたNPO法人「日本で最も美しい村」連合の「失ったら二度と取り戻せない日本の農山漁村の景観・文化を守る」という設立理念に共感し、設立当時より加盟しており、「美しい村を美しいまま残す」ため、村の景観や文化の保全に取り組んでいます。また、毎年2月には、「シーニックバイウエイ北海道(支笏洞爺ニセコルート)」に協賛し、「シーニックナイトinあかいがわ」を開催しています。地域住民が主体と



冷水峠展望台からの眺望



シーニックナイト

なり、沿道にろうそくを灯して一晩だけの幻想的な赤井川村を演出しています。

村の産業

赤井川村の基幹産業は農業と観光です。

赤井川村は、火山の噴火によってカルデラ状の地形を成し、平地よりもミネラルが多い土壌、また、昼夜の寒暖差が大きいためそれを活かした甘みの多い野菜が作られます。

農業を支え振興するための施策の一環として新規就農者支援を積極的に行っています。平成7年度より、新規就農受入支援を制度化し、令和4年度現在まで、後継者を含む27名が就農しています。令和2年度からは、新規就農希望者向けの現地見学会を年に3回開催し、赤井川村での実際の「暮らし」と「就農」を見学する取り組みを行っています。



新規就農研修

観光については、北海道内でも有数の豪雪地帯であるため、その雪を活かしたウィンタースポーツが盛んです。スキー場と宿泊施設を併せ持つリゾート施設（キロロリゾート）が村内にあり、国内外から観光客が訪れ



道の駅あかがわ

ています。そのほかの観光施設として、平成27年の開村115年の折には、北海道で115番目となる「道の駅あかがわ」を開業しました。国道と道道の交点に位置している立地から、観光バスをはじめ、全国各地からご来館いただいています。

また、令和2年7月より一般社団法人赤井川村国際リゾート推進協会（赤井川村DMO）が発足され、赤井川村を訪れる方の様々なニーズに合わせた、観光・農業・食を融合させたイベントの開催やSNSなどを通じて、赤井川村の産業振興を図っています。活動は赤井川村のみならず、小樽市を中心に北後志エリアの「食」「宿泊」「遊び」「自然」を楽しむための体験型観光情報の発信基地として、「小樽・きたしりべしスキー&アドベンチャーセンター」を令和4年7月にオープンさせています。

赤井川村DMOは、赤井川村農泊推進協会の事務局も兼ねており、農林水産省の補助金を活用した事業を展開しています。令和4年度の実施事業として、アスパラやトマトなどの農産物収穫体験や村の食材を活用したメニュー開発、小樽市での赤井川村の農産物の販売を行い、訪れた皆さまにご好評をいただきました。



農産特産品集合

脱炭素化への取り組み

現在、赤井川村では、再生可能エネルギーの利活用や脱炭素化の取り組みを行っており、令和2年度に「赤井川村エネルギービジョン」を策定し、令和4年度には「赤井川村ゼ

「ロカーボンビレッジakaigawa推進戦略」を策定しました。

令和4年度の取り組みとして、北海道大学と連携し、赤井川村の「二酸化炭素排出量調査」のほか、地域の小中学生や高校生、地域づくりの担い手層と学生が交流を図り、脱炭素社会の必要性に関して意識づけを目的とするほか、エネルギーをテーマにした体験型普及活動、持続可能な村づくり、脱炭素社会の形成に向けた地域住民の共創の場を展開し、脱炭素な村づくりの機運を高め、持続可能な村づくりに向けて、行政だけでなく、地域住民の皆さまと共に考え行動することを目的として、ワークショップを開催しました。このワークショップについては、今後も幅広い住民層に向け開催を継続していく予定です。

また、令和3年度にはカルデラ温泉等における再生可能エネルギー導入可能性調査を行い、老朽化したカルデラ温泉の新規泉源掘削の検討を進め、その温泉熱とカルデラ温泉から排出される排湯熱の利用を進める調査を実施しました。令和4年度においては、この調査結果に基づき、新規泉源の掘削によるカルデラ温泉施設内での温泉熱の有効利用と、隣接する避難所である体育館での排湯熱利用の検討調査を実施し、二酸化炭素排出量の削減ならびにエネルギー構造転換を進めることとしています。



カルデラ温泉調査掘削施設

赤井川村地域公共バス「むらバス」

数年前より北海道中央バス株式会社と「赤井川線」存廃協議を行い、令和4年3月31日

をもって「赤井川線」が79年の歴史に幕を降ろしました。鉄道がない赤井川村の唯一の公共交通機関であるバスがなくなることにより、「公共交通空白地域」となってしまうため、令和4年4月1日より赤井川村が運行主体となり赤井川村地域公共バス「むらバス」の運行を開始しました。



むらバス

赤井川村の公共交通（バス）については、令和2年度より公共交通のワークショップ開催や公共交通協議会の開催、シンポジウムの開催、住民との懇談会などを経て、行政だけでなく、地域住民の皆さまにも積極的に参画していただきました。

「むらバス」の運行に向けては、令和3年10月から2か月間の実証運行を経て、他の交通機関との乗り継ぎもスムーズに行えるように運行ダイヤを決定した結果、前年比で1.5倍の乗車率となりました。

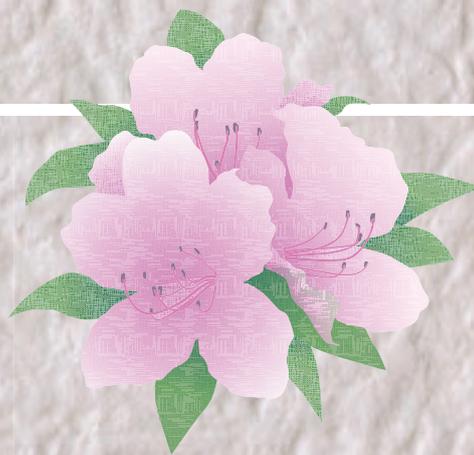
村には高校もスーパーもないため、近隣のまちに行く必要があります。村で暮らしていくうえで必須となる公共交通機関の存続という大きな課題から、地場の小さなタクシー会社と国内有数のリゾート事業者と村が連携することにより、雇用の創出や生活環境・通学環境が向上しました。

今後とも地域住民の「生活の足」としてはもちろんのこと、観光やビジネスにおいても、一人でも多くの皆さまにご乗車いただくと大変うれしく思います。

赤井川村の四季



【春】桜と羊蹄山



【夏】ひまわり



【秋】ライオンの滝



【冬】盤の沢の滝(氷瀑)